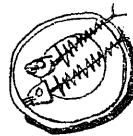


# 教育の慾望の生理

—(3)—

吉 常 藤 加



## 飢えの教育(2)

### 四、生來的反應とその變化

生理慾望、そのうちでもとくに「飢え」の教育を考える場合、これが教育のむすびつきをもつ最も大きな根拠はこの生來的反応の変化である。

#### (一) 生來的反応

先ず、生來的反応について考え方。生來的反応とは、生理慾望を遂行するのに、子供に生れつきそなわつていてこれに感じられる能力をさるものである。これを本項の研究の対象である「飢え」について考えてみよう。

**乳をのむ運動** 生れたばかりの飢えた赤子の唇に、乳房をあてがうならば赤子はどうのような運動をおこすであろうか。それは、言うまでもなく口を開いて乳をのまうとする運動をおこす。この乳房をあてがわれて口をあけて乳をのもうとする運動とは、生来そなわつたものである。これに似た運動に、

乳首にすいづく運動がある。これは舌を乳首にぴったりとあてておこすはたらきである。また、これを吸う運動がある。これは言うまでもなく、すいづいた運動の後にくるもので、舌とほゝとをもつて乳首をすい込む動作をとつたものである。その後には、のみ込む運動がある。これは口中にある乳をほゝと舌とのはたらきによつて、食道におくり込むものである。このように、乳児の哺乳にみられる運動には、乳をのむためのさまゝな生來的反応がみられる。

**哺乳動物共通のもの** ところが、乳をのむための口をあけ、舌ですいづき舌とほゝですい、またほゝと舌でのみ込む運動とは、人間がもつていると同じように、他の凡ての哺乳動物にもそなわつてゐるということである。舌ですいづく運動を観察しておどろくことは、人間の赤子と他の哺乳動物の仔の間で、寸分ちがわぬ動作をとつていることである。自然が生物にそなえた

はたきは、不思議といわなければならぬ。

教育を必要としない 次に、生来的反応についてみられる特徴ようは、教育を必要としないという点である。つまり、これはすこしも学習を要せずに遂行できる性質のものであることを意味する。

(II) 生來的反応から変化したもの 生理慾望の教育が理論的に成り立つ根拠として、この生來的反応から変化したものは、最も重要な要素としてあげられる。且つ、プラツツ教授が最も得意として説くところである。

それならば、生來的反応の変化したものが教育との関わりをもつとは、どうか。プラツツ教授はこれに対しても、生理学的、心理学的、また社会的理由をあげている。

生理的理由 それには先ず生理的理由があげられる。人間の身体である有機体の発育は、時々刻々なされている

もので、それは不思議な発展の過程をたどるものといえる。これを換言すれば、生理機能が成熟するということである飢えを生來的反応でみたして、いた赤子が、日がたつにしたがつて、その生理機能に大きな変化がくる。すなわち子供が七、八ヶ月になると、歯が生えてくる。これは明らかに、子供が発育するにしたがつて、活動もはげしくなる栄養を乳以上にゆたかにもつている固形の食べ物にたよつて、生活することが必要になつてきていることを意味するものである。したがつて、乳にたよつて生活していた時代にはみられない、咀しゃくの運動のおこつてくことなども、生理機能の成熟にあわせてみられる行動の変化としてあげられる。

味覚は、子供が満一ヶ年頃になると急に発達してくる。したがつて、食べ物のもち味を明らかに識別するようになる。教育面から大切なことは、この時期から、子供にたべものゝもつ味をよく味わさせることである。とくにこの点を、生理慾望の教育が主張しよ

れるものとして、大きくとり上げられるものである。味覚の生理機能の発達は非常に複雑している。味覚は口中の粘膜上皮のうちにある味蕾でおこるものである。正確にいふと、これは輪かくよう乳頭、葉状乳頭、きのこ状乳頭にさんざんしてゐる。その外硬口がい、のど、扁とう腺、などにいくらか散在している。味にはすでに今日知られているように、からさ、甘さ、すっぱさにがさなどの四種があげられるが、これららの味覚をおこす位置はいくらくづゝ異つてゐる。たとえば、甘い味は舌の先よりはもとの方が、また、にがさはもとよりは先の方が多く感ずるようだ。

うとする理由はこうである。生理慾望は子供にとって生活の大部分を占めているだけに、子供の精神的はたらきかけの大きいことも亦事実である。空腹のとき、満一才位の子供は、目ざめかけてきている味覚を十二分にはたらかせて、食べものにはたらきかけをおこすものである。このとき、食べものから与える味の刺戟は、そのまゝ子供の感覚を活動させることになる。ゆえに子供の知能をよりよく発達させるためには、刺戟を明瞭に誘導することが必要である。この教育効果を高めるために、セント・デオーデ・スクールでは、食べるものの自体に、またその指導に特別な工夫が払われている。すなわち、食べ物には、なるべく調味料を用いず、食べものの自体がもつ味を子供にあじあわせること。

一、同時期に多種な食べものを口にぱらさせないことである。

心理的理由 生来的反応によつて、

食いの慾望をみたしていいたときは、行動がすべて無意的におこなわれていた。これを哺乳につけていえば、唇にぶれ乳首の刺戟に対して、反射的に口を開いたもので、意識というものは、全くはたらいてはおらなかつた。けれども歯のはえてくる時代になると、子供には不完全ながら意志が目ばえてきて、行動を意志によつてとるようになる。

つまり、この時代になると子供の行動が有意的になるということである。これは心理的にみて大きな変化であるといわなければならない。子供は自らの意志をもつて、行動の前にたゞなればならない。また、自らの選択によって、どのような行動をとるかを決めてゆかなければならなくなる。そして、子供が「三年になると、おぼつかないながら、判断力も目ぼえてくる。一つの自分のとつた行動の結果が、どのようになるかの想像」ときに、経験の結果から一がつようになる。被教育者の考える、あるいは自主的教育の芽

生えとは、この時期にあるのである。そこで、これを飢えの慾望について具體的にいえば、子供は

一、なぜ、肉や魚ばかりを、また人参を嫌つてはならないか、それは保健のために不可避的条件となるから  
一、なぜ、野菜や肉を一しょにほおばつて食べてはならないか、それは個々の食べものがもつ味をあじあうことができないから  
一、なぜ、手づかみをやめて、匙か箸で食べなければならないか、それは社会人になるための生活秩序または法則を学ぶための第一歩となるからなどの理由を解すことができるようになる。この時期こそ、民主社会に住む人間が各自の人格を認められ、且つ奪はれ、各自が社会に在つて各自の人格の名にかけて、責任ある行動をとつてゆかれる能力の芽はえるときに相当するといえる。プラツツはこの頃を、自己の節制の可能な時期であると説いてゐる。つまり、それが他人から注意さ

一、同時期に多種な食べものを口にぱらさせないことである。

生えとは、この時期にあるのである。そこで、これを飢えの慾望について具體的にいえば、子供は

一、なぜ、肉や魚ばかりを、また人参を嫌つてはならないか、それは保健のために不可避的条件となるから  
一、なぜ、野菜や肉を一しょにほおばつて食べてはならないか、それは個々の食べものがもつ味をあじあうことができないから  
一、なぜ、手づかみをやめて、匙か箸で食べなければならないか、それは社会人になるための生活秩序または法則を学ぶための第一歩となるからなどの理由を解すことができるようになる。この時期こそ、民主社会に住む人間が各自の人格を認められ、且つ奪はれ、各自が社会に在つて各自の人格の名にかけて、責任ある行動をとつてゆかれる能力の芽はえるときに相当するといえる。プラツツはこの頃を、自己の節制の可能な時期であると説いてゐる。つまり、それが他人から注意さ

れることにせよ、それに対しても自分自らが責任者の位置に立つて、是正してゆくのに可能な時期といえる。他の言葉で表現するならば、民主社会に住む者が、自己の責任に於て行動をとつてゆく能力をやしなうことの出来る時期といえる。生理慾望の教育はすでに、この時期をとらえて、民主社会に住む者の責任觀をやしなうものである。ゆえに、前述したセント・デオーデ・スクールでは、子供の社会的不適応行為を是正するのに、先ず、反省をうながす方法をもちいる。たとえば、食事をせずに遊んでいる子供に対する「××ちゃんの食べものはどうなつていてる？」或は「みんなは、今食卓でなにをしているか見てどらんなさい」というようだ。

**社會的理由** 生来的反応の変化したものとして、生理慾望の教育が可能であるとの大きな理由に、社会的意味合があげられる。生理慾望のリズムの法則の項で、すでに述べたように、生理

慾望が調整される場とは、外でもない人間の生活環境であり、それは人間社会を意味する。この人間社会とは、言うまでもなく人と人が交わりのおこなうところで、そこには、各人を幸福にするためのさま／＼な定めとなつているものがある。この定めは、その社会に生活する者である限り、守らなければならぬことは言うまでもない。

これを飢えの慾望についていえば、以下のような実例をあげることができる。

「なぜ、食卓をよごして食べてはならないか」それは、他人が不快を感じるから

「なぜ、さわぎたててはならないか」それは、他人に迷惑をかけるから

「なぜ、食事の順序をみだして食べてはならないか（主食をとらないでデザートを先に要求するように）」それは、定つた秩序をみだし、我慾を通すことになるから。

それならば、生理慾望で、社会面がとり上げようとする教育のねらいは何かということが考えられる。これに対する答で重要な点は、生理慾望とともに、第一義的なものは、社会面の生活様式を通して、将来、子供が成長して社会に臨んだあかつき、そこで当面する社会生活のさま／＼な秩序や法則を遂行できる能力を早くからやしなわせるのであるといふわけである。

本誌の読者の仕事の対象が、おそらく幼児期の子供たちであるのにちがいない。したがつて、児童、青年、大人の社会的不適応行為に接する機会が少ないことであると思う。人生のこれら

則をみだしておるものを見出す。このような事実から判断して、幼い時代から秩序をまもる能力をやしなうことが、どんなに大切であるかを考えさせられる。

**独立の精神を** 生理慾望の生活を通して、もとめられる他の教育效果は、子供の独立の精神をやしなうといふことである。これを飢えの慾望について言えば、子供はなぜ母親にたよつて食べはならないであろうか、それは独立の生活態度を早くからやしなうためである。プラツツの食事の行動の指導には、上手に或は手際よく食べるといふことには、余り重きをおいておらない。プラツツに言わせるならば、これは子供の手、または指の筋の運動が発達するならば必然に解決するものである。それより遙に大切なことは、如何にして子供自らが、自らの力を十分に發揮して食べることができるかにある。これは、何を意味しているかといふならば、最初保護者にたよつてい

た生活が、徐々に自らの力だけで生きてゆかれることをいおうとするものである。子供の精神的独立はこのように生活行動が自らの手で確立してはじめて得られる。

**学習が興味多く** それならば、プラツツは子供の食事の行動が発達することを望んでおらないかといふに、決してそうではない。これについては、彼は彼一流の明確な理論をもつてゐる学者といえる。彼によれば、それは、たゞ外部から、行動のもとなる筋の発達をもとめることは不合理である。

食事の行動が発達するのに、より有效でより大切なことは、子供がどうしたら自らよろこんで筋をうごかすようになれるかを考えてやらなければならず、むしろ指導の要点はこゝにあるとそれは、子供が自ら興味をおぼえて行動をおこすように仕向けることが大切である。つまり、子供自らが行動に興味をおぼえるならば、それが必然に筋を正しい型でうごかし、これに基く

いた行動をおこしてゆくといふのである。興味が、行動の基である筋の運動を支配すると説くところが、如何にも生理学者の理論として、関心多く聞くことができる。

### セント ナオーチ スクールの指導

そこで、飢えの慾望の教育を、前述のセント ナオーチ スクールではどんな風におこなつておるであろうか、この実際の面をながめたい。

まず、これについてあげたい点は、子供の飢えの慾望が、食事についての関心をもたせ、且つこれが行動を起すというたてまえから、食事についての一定の法則が定められてある以上、大人の干渉を極度にさけている。大人の干渉が極度にさけられている代りに、食事の法則、また禁じられていることは前以て子供に了解されている。

**法則** 食事の時間は最大限四〇分。フォーク、ナイフ、スプーンの正しい用い方。主食が終つてから、デザートコースに入る。子供の食欲に応じて

お給仕される食物の量はちがつて、野菜が（肉や魚の量は不動であるが、野菜は欲するだけ、少量づゝ何回でもお給仕される）必ず皿をきれいにする。

禁じられていること 行動がぐずぐずしている。食べものや食器、器具で遊んでいる。お話を聞く。さわがしくする。遊び廻る。食べものを口に入れたりでのみ込まない。主用食を食べ終つていないので、デザートを欲しがる。食べものを拒む。食べものをながめているだけ。泣き出すなどである。

年少組（二才～三才）の食堂の記録 この記録は、子供の筋の動き方と行動の適応状態からながめた食堂の特定の手順の学習振りを示すものである。筋

記録の方法は各々の子供について、十五日間を一単位とし、效果のあがり状態をながめようとして計画されたものである。

食事のお給仕——カウンターから食卓に皿（三度或はそれ以上）を運び、食事がすめば、デザートのお給仕——（最高三度）それをまたもとに運ぶ能力を示すものの記録は効果があがつたか大人の助けをかりたかを明かにしている。

お皿をきれいにする——（四段階の仕事）各段階の能力を示すもので、記録は効果があがつたか、大人の助けをかりたかを明にしている。

すでに読者も気づいたこと、思うが

の動き方がどんな風に発達してゆくかは、子供が毎日行動をとつてゆく都度それがどんな風に効果があがつたかの状態によつて明かとなるわけである。行動の適応は子供の非協力的態度また大人からの催促の度数の減つたことによつて判るわけである。

## 幼稚園のための指導書（音楽リズム）

文部省編修 明治図書出版株式会社発行

B5版 七二頁 厚ボール表紙上製本

幼児に対する音楽リズム指導の目標とその具体的な方法及び材料について 音楽リズム専門の諸先生方が種々検討なされ幼稚保育の振興の為出版されたものであります。フレーベル館に於てお取扱い致して居ります。

年少組食堂の生活行動の記録

子供の名 \_\_\_\_\_ # 121a

日	附														
1. 食事の給仕 (1)	vd as	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e
(2)	vd as	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e
3.		e	e					e	e	e	e	e	e	e	
2. デザートの給仕 (1)	vd as	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e
(2)	vd as	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e
3.		e	e					e	e	e	e	e	e	e	e
3. 盆をとる	as as	as	as	as	as	vd	e	vd	vd	e	vd	e	vd	e	vd
4. 盆を盆にのせる	as as	as	as	as	as	as	e	e	vd	e	e	e	e	e	e
5. 盆を食卓にはこぶ	as as	e	as	as	as	w	e	e	e	e	e	e	e	e	e
6. 盆をおくべき位置におく	as as	as	as	as	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	vd
7. ナイフフォークスプーンをおくべき位置におく	s s	sf	ss	sf	ss	sf	ss	sf	ss	s	s	s	s	s	s

記入の記号

口頭で指図をする vd

結果がよい e 結果がよくない in

卅この子供の年齢は二年六ヶ月(入学して最初の15日間の記録)

大人の手伝 as 促してやる u  
非協力 unco